【論文】

ドストエフスキイにおける科学と自由[1)]
―『カラマーゾフの兄弟』論（2）

秦野　一宏

1.

1840年代から50年代にかけて、ロシアでは「生理学もの」と呼ばれる作品が大流行した。「生理学もの」はフランスで生まれ、それがロシアにも伝播し普及したもので、その流行の背景には、西欧における科学、わけても細胞という微細なものの研究における長足の進歩がある。生物学および化学は19世紀半ばにはもう、確固たる原子論的基盤の上に打ち建てられており、その成果は耳目を驚かせるものとなっていた[2)]。生理学ものの作家たちはみな、こうした生物学や化学にならって、小さな人間たちの生きる世界、特に都市の底辺層を観察、研究し、その＜生態＞を描き出そうとしたのである。ドストエフスキイも時代の趨勢に従って、都市の下層民であるジェーヴシュキンを主人公にして処女作『貧しき人々』を発表している。ただ、彼の小さな人間たちへの関心の持ち方は「生理学もの」の作家たちとは少し違う。彼は当時の＜科学的方法＞には疑問を感じていた。科学的に観察するということは、人間を対象、モノとして扱うことであるが、ドストエフスキイはそれに強い反発を感じたのだ。「生理学もの」では、作者（観察者）が小さな人間への憐れみを示す作品がよく見られるが、彼はそのような上からのヒューマニズムを拒み、小さな人間のうちに渦巻く自意識、自尊心を表現しようとした。

その後も、ドストエフスキイは科学に多大な関心を寄せ、地下室人（『地下室の手記』）、ルージン、スヴィドリガイロフ、ラスコーリニコフ（『罪と罰』）、スタヴローギン（『悪霊』）、おかしな男（『おかしな男の夢』）など、科学の功罪に言及する人物を小説の中に多数、登場させてきた[3)]。そ

してドストエフスキイ自身も直接、科学、特にその影響力の重大性について論じている。たとえば1876年1月号の『作家の日記』の中で彼は書いている。自分たちの時代はまだ科学の揺籃期で、将来は想像もできない発見や発明があるかもしれない。しかしそのような大発見、大発明が仮にあったとしても、未来は薔薇色にはならない。もしも地球の公転に相当するくらいの知識が「突然」、「ただで、贈り物として」幾つもふりまかれたら、その時人類はいったいどうなるか。人々の間には、もうこれで自分たちの生活は保証されたと歓喜の渦が巻き起こるにちがいないが、その歓喜は一世代も持たない。「人々は突然、自分たちのところにはもう生命がなく、精神の自由も意志も個性もない、誰かが何もかも一度に盗んでいったということに気づくことだろう[4)]」。人はパンのみにて生きるにあらず。「石をパンに変える」技術を与えてくれる科学は、人間の外面的な生活を豊かにすることはできても、人間の精神的な糧にはならない。科学の恩恵により労せずして得た快適さは時として、生きる意欲さえ奪ってしまう。

このような科学の限界をドストエフスキイは、ゾシマ長老（『カラマーゾフの兄弟』）にも語らせている。ゾシマの見るところ、俗世間を支配しているのは、西欧伝来の科学と自由であるが、科学に関しては彼はこんなふうに言う。「彼らには科学があるが、科学の中にあるのは所詮、人間の五感に従属するものにすぎない[5)]」。おそらく、ドストエフスキイもまた、ゾシマと同じように感じていたのだろう。

またドストエフスキイの考えでは、科学では「公平な分配」を実現することができない。科学は「兄弟愛」の代わりにはならず、どんな科学をもってしてもそれだけでは、禍根を残さず、財産や権利を分けあうことはできない[6)]。

科学はさらに、人間の責任の問題とも関わっている。科学は、「真理 истина」をめざし仮説を立て、それを証明する。しかしそのような科学の方法が生の根本問題を解決するために有効かどうか。科学の真理だけでは人は生きることはできない。そこには道徳的な「真実 правда」が必要となるが、もしも科学の真理が道徳的な真実を圧倒してしまえばどう

なるか。

「科学の道徳」に寄りかかっていれば、「心の平安」が得られる。これは、『悪霊』創作ノートに記されたもので、マルサスの『人口論』をめぐる言葉であるが、『カラマーゾフの兄弟』においてもまた、「科学の道徳」が問題にされている[7]。こちらで取り上げられているのは、19世紀の科学の中でも、機械論的様相がもっとも強い分野だと言われている神経生理学である。すでに顕微鏡によるニューロンの同定もなされるようになっていた。1870年には、これまで不可能と考えられていた大脳皮質への直接、電気刺激を与えるという研究技術の大改革がなされ、それを受けて、「魂」は、大脳皮質運動中枢に局在しているのだという考えが現れてきた[8]。

小説の中ではニューロンという言葉そのものは出てこないが、ドミートリイがラキーチンから聞いたという「神経の尻尾」の話は、明らかにニューロンの「樹状突起」を指している。ドミートリイはその「尻尾」の話をアリョーシャに向けて次のように再話した。自分が何かを見ると、神経の「尻尾」が震え、そこで一瞬にしてイメージができる。だから観察したり考えたりするのは「尻尾」があるからそうなるのであって、魂や「神の似姿」とは無関係である、と。

ドミートリイが何より憂慮しているのは、人間の行動を単なる反射運動にまで貶められるのではないかということである。ドミートリイの考えでは、こうした科学とともに「新しい人間」が登場する。「新しい人間」はおそらく、すべての考え、感情の責任をニューロンのせいにする。となると、「心の平安」は完全な無責任へと突き進み、挙句の果ては、人間の良心も消失することになりかねない。どんな犯罪も「神経の尻尾」のなせるわざで、「すべては許されている」ということになってしまうかもしれない。ドミートリイはそんな新しい人間の作る新しい世界を想像して、神をかわいそうに思う。

ドストエフスキイはさらに法医学においても、人間から責任を除外しようとする傾向をみてとった。なにより彼の関心を引いたのは、同時代の裁判で乱発されていた「アフェクト〔心神喪失、一時的錯乱状態〕」と

いう医学鑑定である。1860 年代から 70 年代にかけて、彼は、この「アフェクト」を悪用する裁判を注意深く見守っていた。たとえば 1876 年 10 月のコルニーロワ事件。夫に対するつらあてで 6 歳の継子を亡き者にしようとしていたコルニーロワは、女の子の両足を掴んで 4 階の窓から投げ捨てた（その子どもは少しもけがをせずに立った）。ドストエフスキイによれば、事件の弁護人たちは、「悪がほとんど善と認められる」ようなひどい弁護を行ったというが、そこで使われた戦略が「アフェクト」だった。弁護人の弁論を彼は次のように戯画化している。「陪審員諸君、彼女がこの子どもを憎まざるを得なかったのはもっともであります。(…) 自暴自棄の極み、狂乱のアフェクトの中、ほとんど忘我の状態で、彼女はこの娘を捉えて……、陪審員諸君、あなたたちのはたして誰が、これと同じことをしないでいられましょうか？ あなたたちのはたしてだれが子どもを窓から投げ出さないでいられるでしょうか[9]」。

『カラマーゾフの兄弟』では、弁護人のフェチュコーヴィチが、被告人ドミートリイの無罪を確実にするための最後のカードとして、「アフェクト」を認めた医者の鑑定を持ちだし、たとえドミートリイが父フョードルを殺害したとしても、致し方ないこととして許されるべきだと主張する。この「アフェクト」に関しては、ホフラコワ夫人にも言及がある。おそらく、カーチャがドミートリイを診断してもらうために、大金を出してモスクワから鑑定医を呼び寄せたことが彼女の好奇心をそそったのだろう。夫人はアリョーシャ相手に、「そのおかげで何もかもが許されている」万能の「アフェクト」についてこう語っている。「大事なのは今の時代、アフェクトを起こしていない人なんているのかってこと。あなたもわたしも、みんなアフェクトを起こしているんです[10]」。「たとえば誰かが腰をおろして、ロマンスを歌っているとします。ところが何か突然、気に入らないことがあって、いきなりピストルを取り出し、誰かれかまわず打ち殺してしまった。でもそのあとでみんなは許すのよ。最近読んだのですけど、すべてのお医者さんたちが認めたんです。今の時代はお医者さんたちが、認めるのよ、何でも認めるのよ[11]」。要は殺人であろうとなんであろうと無罪と「認められる」、「すべては許されている」の

だ。ここでは医学鑑定という名のもと、科学が人間の意志を否定し、神になりかわって許しているということになる。もちろん、ホフラコワ夫人の聞きかじりの「アフェクト」は極端すぎて、滑稽であるが、ある種の真実を言い当てている。ある評者は、半分うわ言のようなホフラコワ夫人によるさまざな出来事の解釈には、アレゴリカルな意味があるとし、夫人はユングの言う「集団的無意識」の担い手となっていると述べている[12)]が、こと「アフェクト」に関する限り、その評言の意図は理解できる。

2.

科学一辺倒は人間から精神の自由や意志、個性を奪い取る可能性があると、ドストエフスキイは考えた。科学と個性の問題はあとで触れることにして、ここでは『カラマーゾフの兄弟』の文脈の中でまず、科学と自由あるいは意志の問題を取り上げよう。

すでに述べてきたところからも分かるように、『カラマーゾフの兄弟』の登場人物の中では、ゾシマと並んで、ドミートリイが科学に不信の念を抱く者としてクローズアップされている。彼の意識する最大の敵手はラキーチンである。ドミートリイはラキーチンから＜現代＞科学についての情報を得る一方で、彼を、「デテルミニスム（決定論）」を絶対視する「ベルナール」の輩として軽蔑する。カンギレムによれば、遺伝子情報が「タンパク質合成の暗号化されたプログラム」と定義されるなら、それはクロード・ベルナールの考えたものに等しい。「指令、指導理念、生命のデッサン、生命の予定命令、生命の計画、現象の方向」など、ベルナールが用いている語句は、遺伝子情報を指示している[13)]。だとすれば、ドミートリイの嘆きは現代的なものでもある。小説中では、彼から「ベルナール」という烙印を押されたラキーチンは、ドミートリイを父親殺しの犯人であると信じ、裁判でも検察側証人として、「彼は殺さざるをえなかった。環境にむしばまれた故である」という決定論、環境主義に基づく自説を披露している。

このラキーチンに関して中村健之介は、彼は「私たちには卑近すぎる

人物」だと紹介している[14]が、「イデー」も「哲学」もなく実利的に生きている点に限って言えば、ラキーチンは現代の多くの日本人に近いのかもしれない。ラキーチンによれば、神がなくともわれわれは人類を愛することができる。「人間の市民的権利の拡張だとか、牛肉の値段を上がらないように骨折って奔走すること」の方が、「哲学なんかに頼るよりも簡単に、身近に人類に愛を示すことができる[15]」のだ。ラキーチンはこうした自身の主張を監獄のドミートリイに得々と話してきかせるのだが、ドミートリイはそんなラキーチンを、この男にとっては「生きるのは気楽なことだ[16]」と嗤っている。

ラキーチンがニューロンや「ベルナール」を持ちだして科学を担ぐのは、科学を信奉しているからではない。彼は、科学を担ぐことがいま流行しているからそうしているだけで、彼にとっての科学とは所詮、要領よく生きるためのよすがでしかない。修道士見習いのラキーチンには、極上の精進料理をたらふく食べることのできる修道院長になってみたいという願望もあった。一方、同じように科学に拠りどころを見出していると言っても、イワンはラキーチンとは違う。西欧で積み上げられた高度な知識を身につけ、理性に最大の価値を置く彼には、科学は当然、是認すべきものである。ただ、彼は、人間の生来の自由を謳いあげたフランスの人権宣言も手放すことができない。問題は科学と自分の意志あるいは自由の両立、連携にある。

イワンの悪魔（分身）が伝えるところによれば、イワンは「地質学的変動」と題した、いかにも科学的思考を前面に押し出したような文章（「叙事詩」）を書いている[17]。「人類が一人残らず神を否認すれば（その時期は地質学的時代と並行して、やってくると信じている）、おのずから過去の人肉嗜食などなくても、すべての世界観、とりわけすべての道徳観が崩壊し、新しいものが訪れるだろう。（…）自分の意志と科学によって、毎日毎時たえまなく、もう際限なく自然を克服してゆけば、それによって人間は毎日毎時、きわめて高度な快楽を感じて、以前の天上の快楽に対する希求は、ぜんぶそれに取って代わられるだろう。（…）人間はその誇りから、生が一瞬であることに何ら不平をもらすこともないと理解し、

もはやいっさいの報いなしで兄弟を愛するようになる。愛が満たすことのできるのは生の刹那でしかないが、その愛の刹那性を意識するだけで、愛の炎は、かつて死後の永遠の愛を希求するなかで燃え上がっていったのと同じくらい、強く燃えさかることだろう[18]」。

神がいなくとも、誇り高い人間は「自分の意志と科学」によって、自ずから同胞を愛せるような理想的社会を実現することができるというこの内容と、同じ彼がゾシマ長老との会合の席で言った「不死がなければ、善行はない」という言葉とはうまく噛み合わない。

「不死がなければ、善行はない」という言葉はたしかにイワンが長老に対して言った言葉であるが、その結論に至った具体的な内容はミウーソフによって伝えられている。「当地の上流婦人たち」の集まりで話され、ミウーソフが再話したイワンの思想は次のようなものだった。そもそも人間への愛を強制するものはない。もしこれまで地上に愛というものがあったとするなら、それは自然の法則によるものではなく、人々が自分の不死を信じていたからである。「今のわれわれのように、神も自分の不死も信じない個々人にとっては、道徳的な自然法則はたちどころに、以前の宗教的なものとはまったく正反対のものに変わらざるをえず、悪行にも至る極端なエゴイズムが人間に許されなければならないばかりではなく、それこそがその状況のもとで不可欠な、もっとも合理的な、もっとも高潔と言っていい結論として認められることにさえなる[19]」。ここでは「人間の誇り」にも言及はない。「道徳的」自然法則は「たちどころに」変化するもので、「科学と意志」が新たに法則を作りだすわけではない。ここで描き出される人間は、ただもう時代の状況に振り回されるだけである。「地質学的変動」の中で示された、燃えさかるはずの愛の炎もない。神なき世界でも、生の刹那性を意識すれば強く愛し合うことができるのだという、誇り高い人類のありうべき＜理想的未来＞がすっぽりと抜け落ちている。

あるいはその主張の過激さからか、「上流婦人たち」の集会で話されたイワンの意見は、安易に人類愛を信じている彼女たちにショックを与えることを目的としていたのではないかという指摘する評者もいる[20]。し

かし、これはどうか。二つの話が食い違うのは、相手によって内容を変えたという以上に、イワン自身が、人類を信じ尊敬すると同時に軽蔑するというどっちつかずの二重の考えを持っていたためではないか。

「すべては許されている」というミウーソフによって伝えられた「公式」はさらに、ドミートリイによって飾り気のない言葉で、次のように言い換えられる。「すべての無神論者の立場からすると」、「悪行」は「許されなければならない」どころか、「もっとも不可避でもっとも賢明な結論」として認められる、と。イワンは翌日アリョーシャに、このドミートリイの言い換えた「バージョン редакция」も悪くはないと言っている。この「バージョン」という言葉遣いから分かるのは、イワンがこの公式を真理ではなく、ある種、未定稿の作品として理解しているということだ。しかも決定稿は、どうやら完成していない。彼のイデーはどこまでも流動的なものなのである。あるいは彼に言わせれば、そこにこそ自分の自由意志がある、ということになるのだろうか。

周知の通り、「自分の意志」と、その前にはだかる「自然」の問題は、『カラマーゾフの兄弟』で初めて取り上げられたものではない。すでにキリーロフ（『悪霊』）やイポリート（『白痴』）によって提示されてきたなじみのテーマである。根底にあるのは、ホルバインの絵『イエス・キリストの屍』に見られるような、キリストすら圧倒する自然の力を前にして、自分の意志をいかに通すことができるかという問いかけである。たとえばキリーロフは、「自然の法則」がイエス・キリストにさえ憐れみをかけなかったことから、神はいないと考えた。神がいないとすると、すべての「意志」は自分のもので、その意志（「我意 своеволие」）を是が非とも自殺によって「証明する」必要がある、彼はそう結論づけ、実際に自殺を決行した。また、肺病で、死期の迫ったイポリートは、「自然」が余命3週間という判決で自分の活動を制限してしまったので、「自分の意志」で始め、終わらせることができる唯一のことは、自殺しかないという結論に達した。失敗はしたが、彼も考え通り、実際に自殺して見せようとした。いずれも「自分の意志」によって自然を克服しようとする点では同じである。イワンの場合はそこに科学が加わるが、いったい意

志と科学はどのように連携して圧倒的な自然に立ち向かうのか、その説明はない。科学は人間を再教育し、意志も気まぐれもない「ピアノの鍵盤」みたいなものにする[21]、とは地下室人の言葉だが、このような危惧に対する納得のゆく反論もないまま、科学と意志の連携をさらりと説かれると、なにやらペテンにかけられたような気がしてくる。

ペトロフスキイはこの「地質学的変動」引用部分を「誇りにあふれた言葉」と捉え、「宗教的・倫理的図式」を示すゾシマの説教よりも説得力を持つと述べている[22]が、私にはわからない。引用部分は私には、「この問題を解決するには、自己の人格を自己の現実と対置することが必要である[23]」というラキーチンの「知的」であるけれど、「わけのわからない、あいまいな」文章を思い起こさせる。意志と科学、人格と現実。知的レベルの差こそあれ、イワンもラキーチンも、進歩的知識人の言葉を無理やり組み合わせることから生じる文意のあいまいさよりも、進歩的知識人の雰囲気を漂わせることを優先させている。ただ、イワンの文章（「地質学的変動」）には、ラキーチンにはない善あるいは理想への強い執着があることだけはたしかで、この執着こそが、イワンをイワンたらしめているのだろう。

さて叙事詩「地質学的変動」はまだ終わらない。その後段はこうである。「そのような時〔兄弟を報いなしに愛するようになる時期〕はいつの日か訪れることがありうるのだろうか。もし訪れるのであれば、すべては解決し、人類は最終的に安定する。しかし人間の抜きがたい愚かさを考慮すると、たぶん、安定はまだ千年ほど先になるだろうから、今、真理を認識する者はみな、新しい諸原理に従って、まったく好き勝手に安定することが許されている[24]」。

ここでは人間に対する視点が急激に変化している。前段で、全体として誇り高かったはずの人間は、後段では一転して、根っからの愚か者として登場する。そしてここでは、ただ一握りの賢者、例外的な「真理」の認識者だけに特権が付与され、彼らだけが、好き勝手に振舞うことが「許される」ことになる。人間は人神と奴隷に分化するというのだ。イワンによれば、人神たちは、奴隷人たちを縛るどんな道徳的障害も、軽々

と飛び越えてゆくことができるのだという。ここにもまた、「すべては許されている」という公式の別「バージョン」がある。

イワンの理論にはどの「バージョン」においても、真実であることの証明がない。キリーロフもイポリートも、自身の言葉を行動によって保証しようとした。二人ともに、文字通り命を賭すほどに切実に自身の言葉を実現しようとしているが、イワンにはそれがない。彼のイデーには、「もし不死がないとしたら～」、「人類が一人残らず神を否認すれば～」という条件が付いている。彼はこうだと断定しない。あくまで仮説のもと、不死があれば（宗教的に見れば）こうで、不死がなければ（科学的にみれば）こうだというように、それぞれのケースで考えを突き詰めようとするが、このような思考法はどこかしら、カントを思い起こさせる。ラキーチンにはこのイワンのカント的思考法が癪に障った。「魂の不死はない、とすると、善行もない、つまり、すべては許されている。大風呂敷もいいところで、要するに言ってみれば、『一方から言えば、〔これを〕認めないわけにはいかないし、他方から言えば、〔あれを〕認めないわけにはいかない』というだけのことなのさ。あの人〔イワン〕の理論の本質は、卑劣そのものさ！[25]」。ラキーチンはもちろん、意識していないけれども、ものの見方を変えるだけでいいんだというのは、イワンの理論への批判というだけでなく、自由と決定論という二律背反のカント的な解決の仕方を揶揄しているようにも見える[26]。

一方、イワンに言わせれば、ラキーチンの輩は、人間が神を創ったことを疑うことなく「公理」にしてしまっている。ところがその手のロシア産の公理はどれもが「ヨーロッパの仮説から引っ張り出してきたもの」である。イワンはロシアの公理を、その源であるヨーロッパの仮説に戻すべきだと考えている。つまりは、ゆるがぬ事実などないということだ。

あるいは科学的思考とは本来そういうものなのかもしれない。科学とは体系的であり、経験的に実証可能な知識のことだと一般的には理解されているが、結局のところ、絶対だと思われていた理論も未来において覆らないという保証はないので、厳密に言えば、イワンの考え通り、科学とはすべて推測あるいはドクサであると言っても間違いではないのだ

ろう。ただ、すべては推測にすぎないと強調しすぎるのも、当を得ない。カール・ポパーの指摘する通り、「推測」を真剣に受けとるか、深く考えずに退けるかの「決断」もまた、科学には必要なのだ[27]。たとえば太宰治は「仮説を信仰するところから、すべての科学が発生する…」などと科学と「信仰」を結びつけているが（『パンドラの匣』）、信仰とまで言わなくとも、「ある程度の」頑固さや独断主義のようなものが科学にはなくてはならないのである。ところが、イワンは科学的な思考をめざしながら、この「決断」がどうしてもできない[28]。彼は、ものごとを揺るぎない決定に導きたいが、同時に導きたくない。このあたりはアリョーシャとまったくちがう。アリョーシャは「真剣に」思索し、不死と神とは存在するという確信にうたれると、その後はもう後戻りはせず、「不死のために生きたい、中途半端な妥協はしない[29]」と心に決め、ひたすら自分の道を歩んでゆく。一方イワンはどこまでも揺らいで、その揺らぎが自己の分裂を引き起こし、しまいには分身（悪魔）が出現する運びになる。

ただこの悪魔の出現は、イワンが決断しないでいることのもう一つの理由とも関係する。その理由とは、キリーロフやイポリートが命がけで守ろうとした「自分の意志」、自由への拘りである。彼にはどうしても、自分の自由に制限をかけることができなかった。

イワンの中には常に、自身の考えに反論するもう一人の自分がいる。そして、自分の自由を絶対化する彼は、そのもう一人の自分を否定することができない。イワンは、論理を積み重ねながら、その実、何も証明できていないことを知っている。彼は自身の立てた前提条件そのものを信じきれないことに苦しむ（と同時に、それは、仮説である限り、それでいいという考えがもう一方にある）。悪魔はイワンの心の中を見透かしたかのように言う。どうして「真理 истина」の保証が必要なのか。「ペテン」をするのになんで真理がいるのか？ この悪魔は、いわばイワンの中に潜むハイドであり、「ペテン」云々もまた、イワンの＜ハイド＞的な考えの一つである。ハイドはジキルにこう囁きかけている。まず「すべてが許されている」という結論ありきで、きみは、その結論に合わせるように論理をでっちあげただけですよ。「真理の認識者であれば」、とい

うような高尚な条件を取っ払って、自分だけには「すべてが許されている」ということでいいじゃないですか。このハイドのレベルでは、イワンとラキーチンの差がほとんどなくなる。たとえばラキーチンは、「すべては許されているのか、何をしてもかまわないのか」というミーチャの問いに、こう答えている。「そんなことも知らなかったのか」、「賢い人間は何でもできるし、賢い人間はなんだって手に入れることができるが、きみなんかは人殺しをし、どじを踏んで牢獄で朽ち果てることになるんだ！[30]」。真理の認識者をうまく立ち回るラキーチン流の「賢い人間」に置き換えてしまえば、そこに現れるのは、自分の利益だけを考え、自分だけを正当化するエゴイズムでしかない。こんな俗物的発想、非論理の没理想は、誇り高いイワン（ジキル）にはとても耐えられるものではない。

3.

人は自由だ、人を拘束する思想などないという考えは、ドストエフスキイの作品の中で、さまざまに変奏される。「すべてが許されている」というのは、ドストエフスキイにあっては、ありふれた考えである。ラスコーリニコフ（『罪と罰』）はナポレオンたちを念頭に、強い人間にはすべてが許されると考えていた。一方、レーベジェフ（『白痴』）は弱い人間にはすべてが許されると考える。時代が悪いのなら、ちっぽけな「アトム」にすぎない自分など、ただ流されるだけで、みなと同じように卑劣にふるまってもまったく差支えないというわけだ。自分が立っている場を無批判に肯定し、論理の衣装を身にまとって自己を正当化しようとする、その根っこは同じだ。レーベジェフの言葉を敷衍すると環境説になり、ここでもまた「ベルナール」の決定論と同じく、「すべては許されている」という結論が待っている。環境説に関しては、ドストエフスキイは 1873 年の『作家の日記』に次のように記している。「環境説は、人間は社会機構の一つ一つの誤りに左右されるものだと見做すことによって、人間を完全な無個性 безличность へと導き、個人のあらゆる道徳的義務や、あらゆる自主性から人間を解きはなってやり、ついには想像し

得る限りのこの上なく忌まわしい奴隷状態へと導くのである[31]」。「科学の道徳」ならぬ「環境の道徳」が、人間の責任を解消してくれる。極端な話、もし環境説が正しければ、「煙草がほしいのに金がない、ということから、煙草を手に入れるために他人を殺してもいいということになる[32]」。

同じく『作家の日記』(1877年6－7月号) には、八つぐらいの子どもにたばこを吸わせている父親をめぐって、同種の思想に言及した記述が見られる。「この紳士〔父親〕は何を証明しようとしているのか」。「偏見への蔑視のつもりか、それとも以前、禁じられていたことすべてはナンセンスで、反対に、今はすべては許されているという新しい思想を実行するつもりなのか。理解できない[33]」。この「新思想」は、哲学者のもとを離れ「巷を漂っている思想」で、すでに触れたように、ラキーチンの行動原理となっている。「リベラル派きどりの鈍物」、「出世主義者」のラキーチンは修道士の僧衣を身につけていながら、神を信じず、その上、そのような自身のあり方につゆほどの良心の呵責ももたない。従妹のグルーシェニカから毎月、遊興に使う金をせびりながら、その金をありがたがることもなく、それどころか陰では彼女を「囲い者」、「淫売」と呼んではばからない。彼女との親戚関係について聞かれると、そんなことを聞かれること自体がありえない侮辱だと、猛然と食ってかかる。ラキーチンの自身にくだす評価は異様に高いが、その根拠はきわめて薄弱である。彼は、「卓の上の金を盗まない」という理由のもとに、「自分はこの上もない誠実な人間」であると固く信じて疑わないのだ。この「誠実な人間」は、同じ修道士見習いの「友人」アリョーシャが聖人のような雰囲気を漂わせていることをやっかみ、彼をなんとかして堕落させようと画策する。すべてが損得勘定で、愛情すら取引の対象と考えている。何かちょっとでも面子をつぶされたと感じると、自分の方が悪い場合でも自尊心がうずき、すぐに報復措置を取る。5万ルーブルの財産だけを目当てに、「敬虔な信心深い若者」という仮面をかぶりホフラコワ夫人にうまく取り入っていたが、袖にされたと感じるや、すぐさまゴシップ紙(『噂』) に彼女を罵倒した文章を匿名で投稿し、溜飲を下げる……。も

う自由気ままで、やりたい放題である。

このような破廉恥なラキーチンを特徴づけるのが、「すべては許されている」という流行の「思想」であった。この流行の思想の淵源はヨーロッパにあるが、ロシアにおいては思想は重さを失い、「巷の思想」となる。ラキーチンは「巷の思想」にどっぷりつかった巷の人間であった。

ドストエフスキイの考えでは、ヨーロッパは全面的な没落の前夜にあった。「道徳的なるものの基礎」を根底から震撼させられ、ヨーロッパは「普遍的なものすべて、絶対的なものすべて」を失い、まさに崩壊しようとしている[34]（1880年『作家の日記』第3章）。その倍音が「すべては許される」という思想となってロシアを漂っている。ドストエフスキイはこのような状況に強い危機感を抱いていた。

ゴロソフケルによれば、「すべては許されている」と考えるラキーチンは、スメルジャコフや悪魔同様、イワンの「意識の奇形的な一片、彼の一面の代役」あるいは、イワンの「反響体」にすぎないことになる[35]。しかし、ラキーチンはスメルジャコフのように考えをイワンから授かったわけではないし、悪魔のように、イワンの考えを反芻しているわけでもない。私には、むしろ世間の「新思想」に乗っかっている無数のラキーチンたちの方が主で、イワンの方がむしろその「反響体」であると感じられる。彼は、いつのまにか感染してしまった時代の病をそうとは知らず、意匠を凝らして、作品化しているのではないだろうか。

まず、イワンが一貫して大切にしているもの、絶対に譲れぬものは、悪魔があてこすった自分の意志、自由である。見方によれば、その意志は尊大で、傲慢である。彼はどんな場合であろうと、支配されること、だれかに従属的な関係を強いられることを頑なに拒否する。熱をあげていた、そして今でも大好きだというカテリーナですら、彼には平安を乱す桎梏と感じられた。彼は一人モスクワへ旅立つと決めた後、アリョーシャに、半年近くも縛られてきた彼女からの解放を喜び、シャンパンを開けて自身の自由を祝いたいと言っているが、この言葉には、彼の本音が表れている。興味深いのは、イワンが相手側の自由を寸分も顧慮しないことである。「わたしは彼女に手を焼いた Я мучился с ней[36]」、「彼

女は私を苦しめた Она мучила меня[37]」とは言っても、<わたしたちはともに苦しんだ>あるいは<わたしは彼女を苦しめた>とは決して言わないのだ。イワンによれば、自分が苦しむことになった責任はすべて相手側にある。

イワンが守ろうとする意志の自由には制限がない。イワンは、ドミートリイが父を殺しかねない勢いで暴行を働いた時には、すぐさま止めに入った。彼は両手でドミートリイに抱きつき、力いっぱい突き放した。そのあとでは、「自分は人殺しなんてさせはしない」と公言している[38]。イワン自身は、この瞬間的な無意識的行動はどのように理由づけるのか。おそらくイワンが持ち出す理由は、人殺しが最大の罪であるからというものではない。今、この瞬間、人殺しをさせたくないと、自分がまさに望んでいるからだ。彼ならそう説明しようとするにちがいない。

このことと関連して興味深いのは、イワンと酔っ払いの百姓のエピソードである。スメルジャコフの家へ行く途中、いらいらしていた彼は、よろけてぶつかってきた酔っ払いの百姓を突き倒した。百姓はかちかちに凍った地面にどすんと倒れ、うう！と呻いたかと思うと、そのまま意識を失い、動かなくなる。イワンは、「こいつは凍死するな」と思ったが、そのまま見捨てた[39]。しかし、帰り道になると気分が変わり、すでに雪に顔が埋もれていた百姓を「突然」抱き起こし、その後もこまごまと世話を焼いている[40]。彼が百姓を助けたのは、彼自身が自己観察しているように、フョードル殺しの犯人がスメルジャコフであり、自分も殺害を教唆した可能性があるということを裁判で証言するという決断が「確固として下された」からである（この決断はすぐさま揺らぐが……）。おそらく、この「観察」をもとに考察を進めれば、良心の問題に行きついてしまうのだろうが、彼の思考は用心深く、その手前でストップする。競合する別の思考が、良心の問題を抑えこんでしまうからである。

なぜ人殺しは恒常的に許されないのかということを説明できるイデーは、イワンにはない。人は、他人が生きる資格があるかどうかを判断する権利をもつことができるのか、というアリョーシャの問いに答えて、彼は、この問題は資格ではなく別の理由が関与しているとしながらも、

権利というなら、人は何でも望む権利を持つと言う。アリョーシャはそれに対し、「まさか他人の死は望みはしないでしょう？」と問いかけるが、イワンは動じない。「他人の死だって仕方ないだろう。みんながそんなふうに生きていて、実際にほかの生き方では生きられないのだとしたら、何のために自分に嘘をつく必要がある？[41]」。「みんな」同じなのだから、当然、自分にも他人の死を望む権利があるというわけだ。

この自由をめぐる会話は、イワンから次のような本音を引きずり出す。

「おれはいつでも〔兄から〕親父を守ってやるよ。とはいっても、おれはこの場合にも、自分の望みにおいては、完全な自由 полный простор を留保しておくからな[42]」。

彼はつねに、翻意できるぎりぎりの自由を手元に置いておく。今はこう思うが、状況が変われば、一瞬にして考えも変わる。今は親父を守りたいが、親父を守らないと思うようになるかもしれない。が、次の瞬間にはやはり、そうは思っていないかもしれない……。このような自分の自由の絶対的な優先は、地下室人が、自身に結論を下すことを避けるために用いた「逃げ道」を想起させる[43]。「逃げ道」を持っている限りは、地下室人は観念が堂々巡りする「地下室」から出ることはできない。イワンが何事も決定できないのは、この自己限定の無限大の自由という観念がつねに立ちはだかるからである。こうして、イワンは、自分にとって「すべては許されている」という結論を導き出してくる。この結論は「みんな」の生き方と矛盾しない。イワンは「みんな」の生き方を自身の考えの言い訳にしているのである。

とはいえ、無制限の自由から導き出されたこの「すべては許されている」という考えを支えている動機は、いかにもエゴイスティックで、そのことはイワンも意識している。みんながやっていることは、自分も当然、する権利があるなどというのは彼の実感から生まれた言葉であろうが、論理としては粗雑であるし、だいたいが、自分も「みんな」と同じだと認めることは、誇り高い彼の自尊心が傷つく。そこで自己正当化の

理論武装が必要になる。イワンが「地質学的変動」と題した「叙事詩」において＜高尚な＞理論を考えたり、また別の「叙事詩」で、人類のことを熱烈に愛している大審問官を登場させ、彼に、幸福の名のもと、他人の自由を奪う自分の自由を巧妙に擁護させたりするのも、まさにこのためである。

4.

無制限の自分の自由はまた、他人の個性を受けつけない。このことをゾシマは、ある「知的な」医者を例に、次のように語っている。この医者が言うには、人類一般を愛すれば愛するほど、一人ひとりを個々人として愛せなくなる。必要があれば、人類のためには十字架にかけられてもいいとさえ思うが、同じ部屋で誰かといっしょに過ごすのは、たとえ二日でも耐えられない。「誰かが近くにいると、もうその者の個性が自分の自尊心を圧迫し、自分の自由を奪うのだ[44]」。この医者と同じようなことをイワンも言う。「人間を好きになるには、相手に姿を消してもらわなければならない。そこにちょっとでも顔を出せば、そのとたん、愛はきれいさっぱりなくなってしてしまうのさ[45]」。

ロシア語で「個性 личность」は「顔 лицо」に由来する。イワンの場合は、全人類を愛せても、「顔」を持った個々人は愛せないというのであるが、つまるところ、彼もまた、ゾシマの語る医者のように、「個性（＝顔性）」が自尊心と、自由を侵害するということなのだろう。

「個性」ではなく「顔」が前面に出ることで、イワンの抱える問題は、いっそう明らかになる。イワンによれば、空想の中でなら人類を熱烈に愛することができるが、間近に現実のあるがままの顔があると、自分も含め、人は、とたんに興が覚めてしまうという。ただ、彼に言わせれば、子どもは例外で、たとえ顔が汚くとも、醜くとも愛することができる。これはしかしながら、子どもが知恵の木の実を食べていない、子どもは無邪気だからというような単純なことではあるまい。子どもに関しても、イワンは二重の考えを持っていた。たとえば、イワンは自作の「叙事詩」で、大審問官に次のように語らせている。「わしらは彼ら〔人間たち〕が

弱く、哀れな子どもでしかないということ、しかし子どもの幸福こそ何よりも甘いものであることを教えてやるのだ。(…) 彼らはわしらに驚き、震え上がり、わしらが何千億もの荒れ狂う群れをおとなしくさせることができるほどに力があり、賢明であることを誇らしく思うだろう。わしらの怒りに打ちしおれて、がたがた震え、おじけて知力も失って、その目は女、子どものように涙もろくなるだろう。だがわしらが合図をすると、彼らはいとも簡単に陽気になり、笑いだして、明るく喜んで幸せな子どもの歌に興ずるようになる。むろん、わしらは彼らに労働させる、だがその余暇には、子どもの歌と合唱、無邪気な踊りを与え、彼らの生活を子どもの遊びのようにこしらえてやるのだ[46]」。子どもは御しやすい。大人の許しのもとで、何でも大目に見てもらえる弱い者、無力な者だ。ここで暗示される子ども観は大審問官のものであると同時にイワンのものである。とすれば、結局のところ、イワンにとって大人の他人の「顔」とは、自分の意のままにならないもの、自分と同じように自由を要求し、自分に反応を強いるものである。自分の自由を脅かすもの、自分の意のままにならないものを、彼は愛せない。空想の中ではなく、現実に愛するためには、大審問官のように、相手を（あるいは人々を）下に観て、何らかの方法で、飼いならさなければならない。これはしかしながら、もはや愛ではなく、支配と呼んだ方がいい。

「顔」は地下室人（『地下室の手記』）も悩ませた。といっても、彼の場合、問題となるのは他人の顔ではなく、自分の顔である。「彼は卑劣な人間と思われないよう」、顔には上品な表情を浮かべていようと、「痛ましくなるくらいの努力をした[47]」。イワンもまた、地下室人と同じように、自分の顔を気にして、次のように言う。たとえば飢えのようなものだったら「慈善家」もそれなりに苦しみを認めてくれるだろうが、「イデー」のような、「高尚な苦しみ」ために自分が深く苦しんでも、まったく理解してもらえないのだ、と。あるいはイワンも、地下室人のように、「知的」に思われるように努力して、表情を作ったことがあったのだろうか。どうやら自分の顔もまた、他人の顔同様、地下室人やイワンたちの意志に従わぬもの、彼らの自由にならないものであるらしい。

興味深いのは、ゾシマに多大な精神的な影響を与えた「謎の訪問客」と呼ばれる男の言葉である。彼は 19 世紀という時代の特徴を「孤立化」「細分化」に見て、こう述べている。「今では誰もが自分の顔をなにより際立たせようとすることに夢中になって、自分自身だけで人生の充実を味わいたいと願っていますが、いくら努力してもそこから帰結するのは、自滅そのものなのです[48]」。

「謎の訪問客」によれば、このような無益な個人的「努力」に代わって「顔を真に保証してくれるもの」は、「人間全体の一体性 людская общая целостность」の中にこそあるのだが、そんな考えなど、今の「人間の知性 ум」は冷笑し、まともに相手にしようともしないという。

同じ顔でも、それを見る側でまったく異なる。たとえばアリョーシャにとってゾシマ長老の「顔」は世界で誰より愛する「顔」であり、「崇拝と呼べるほどに敬ってきた、心義しい人の顔」であるが、この同じ顔もリベラリストのミウーソフにかかると、受ける印象がまったく異なる。「〔ゾシマの〕顔全体が非常にひからびた感じで、細かな皺に覆われ、とくに目の周りにそれが密集していた。その目は小さく明るい色をしていて、くるくる回り、二つの輝く点のように煌めいていた。(…) 鼻は長いというほどではないが、鳥のように鋭くとがっていた[49]」。結局のところ、「どの特徴をみても、こいつは意地が悪く、底の浅い、高慢ちきな魂の持ち主だ」と、ミウーソフは断じた。これはミウーソフだけの印象ではない。語り手は言う。「じっさい長老の顔は、ミウーソフでなくても、多くの者たちの意に染まないのではないかと思える何かがあった[50]」。つまりは、「知性」で顔を分析するミウーソフたちは、部分的特徴に捕らわれ、「真の」顔がどんなものなのか理解できない。マックス・ピカートの言葉を借りて言えば、「観察者の立場に立つ人間」には「顔の素材、つまり生命の抜けたもの」しか見ることができないのだ[51]。

アリョーシャは違う。彼は「素材」を見ているのではない。裁判で検事からどうしてあなたは、お兄さんが断固無実であると信じているのかと尋ねられたアリョーシャは、こう答えた。「顔で、わたしは彼〔ドミートリイ〕が嘘をついていないとことがわかりました[52]」。この非論理、

非科学的な発言に、検事たちは内心、あきれかえっている。ドストエフスキイはここで、犯人であることを「数学的に証明する」物的証拠（ドミートリイが酔って記した殺人計画書）、うずたかく積み上げられた証言、論理的証明、心理学的証明などによって代表される理性の紡ぎだした総体と、アリョーシャによる「顔」の単純きわまる判断を同等の重みをもって読者に比べさせている。

すでに述べたように、ロシア語の「個性」は顔に由来するが、この「個性」というものは、ドストエフスキイにあっては、本来、人を他の人から区別するためのものではなく、孤立せず、他の人間と共にある何かを伝えるものなのだろう。それは、「西欧で言われている個性」より「はるかに高度な個性」である。科学が個性を奪い去るとドストエフスキイが言うのは、人間同士がばらばらにされ、その「一体性」をも破壊してしまうという意味なのであろう。1876年の『作家の日記』で彼は、ウェルテル（『若きウェルテルの悩み』）が自殺する直前、大熊座との別れを惜しんだことに触れ、次のように述べている。この星座がウェルテルにとって貴いものであったのは、「自分はこの星座を前にして、決してアトムではない、無ではない」、自分は「無限なる存在」と似た存在（神の似姿）なのだと自覚できたからである。そして彼が、そのように自分が何者であるかを自覚できることができるのは、ただただ「自分の人間としての顔 лик」のおかげである[53]、と。ドストエフスキイは<今>のロシアでは、「人間に与えられたこの顔」が「わけもなく、めちゃくちゃに打ち砕かれている」と嘆いている[54]。「打ち砕かれている顔」とはまさに細分化された世界、孤立した世界の象徴である。

ドストエフスキイにあっては、個性あるいは顔は、科学の届かない精神性と深く関わっている。

ゾシマは、アリョーシャの「顔 лик」は「なつかしい」ものであると同時に、自分にとって前兆であり予言であると言う。つまりは、アリョーシャの「顔」がゾシマは17歳で死んだ自分の兄マルケルを思い起こさせるということなのだが、二人の「顔立ち」はそれほど似ていない。しかし「精神的には духовно」、まるで兄が生まれ変わって何かを洞察させ

るために訪ねて来てくれたかと思われるほど、よく似ている。ゾシマにとって（そしてドストエフスキイにとっても）、「顔」はその人の精神が溢れ出て、一つの形をなしたものなのだろう。ゾシマはアリョーシャを、苦しむドミートリイのところに遣わすが、その理由は、「弟としてのおまえの顔 лик があの人の助けになると思ったから」だという。「顔」が助けになるという意味は、精神的な支え、あるいは癒しになるということである。そういえば、堕落し、時に残忍ですらあったフョードルもまた、酒に酔い、道徳面での不安が高まってどうしようもなくなった時は、堕落していない、何も咎めない、自分をかたく守ってくれる下男グリゴーリイをそばに呼び、その顔をただもう一心に眺めていた。

ゾシマやアリョーシャが顔と同じ程度に信頼を寄せるのが、「言葉」である。検察側が、ドミートリイの有罪を示す証拠をどれだけ積み上げようと、ドミートリイ自身が「親父の血に関しては僕は無実です」と言う限り、アリョーシャはそれを信じる。グルーシェニカもまったく同じだ。彼女は予審判事に向かって、父親殺しに関しては無罪だと断言するドミートリイの言葉を保証する。「わたしはこの人を知っています。（…）良心に恥じることなら絶対にごまかしはしません。真実をそのまま、はっきりと言います、それを信じてください！[55]」。しかしイワンは、アリョーシャやグルーシェニカと違い、検事側の持ちだすさまざまな証拠によってことを判断した。スメルジャコフが彼に本当のところをうちあけ、自分が犯人であると告白し証拠の奪った金を突きつけるまで、彼はドミートリイの言葉に疑いをかけていた。イワンにとっては自明のものなど、何もない。愛ですら、不死や神が存在するという条件のもとでしか成立しないと考えている（ただし—話はややこしいが—その考えも絶対というわけではない、一つの「バージョン」である）。不死を信じなければ愛はないというのは、取りも直さず、見返りなしでは人は愛せないということだ。この愛に見返りを求めるという点では、彼はラキーチンやホフラコワ夫人、フェチュコーヴィチと変わらない。彼には、飢えて凍えた旅人を助けた「恵み深いヨアン」も信じられない。ヨアンは旅人を「抱きしめ、何かの恐ろしい病気のために腐りかけて悪臭を放つ彼の口へと

息を吹きかけ」た[56]。こんなことはイワンにとっては「義務によって呼び起された愛」や「自己に引き受けた宗教上の懲罰」としか思えない。それは彼にとっては「人々に対するキリストの愛」の物真似であり、この世ではあるはずもない「奇跡」であった。

5.

科学は、人間の「個性（人格）」あるいは「一体性」を危機に陥れる可能性がある。これがおそらく、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』の中で伝えたいと思ったメッセージの一つであろう。しかし、ドストエフスキイはそのことを論理立てて、証明しようとはしない。もしそれを強行すれば、ミイラ取りがミイラになってしまう。ドストエフスキイは、具体例を挙げること、さらには対照化することで読者に判断を促し、自身がミイラになることを回避しようとした。

すでに触れてきたように、悪魔を出現させるイワンの人格崩壊は、まさにその＜具体例＞の一つであった。対照化の例では、イワンとドミートリイ、「数学的」証拠、証明と「顔」などが挙げられる。それだけではない。対照化は、もっと大きな単位でなされている。

『カラマーゾフの兄弟』には、罪と悔悟、ゆるしをテーマとする農婦の素朴なエピソードがある。このエピソードが、「すべては許されている」というイワンの公式に相対するものとして読者に差し出されていることは、間違いない。

エピソードを詳しく見てゆこう。

ゾシマ長老のもとに、連れ合いを亡くして 3 年目になるという肺病やみの農婦が、魂の救いを求めてやってきた。彼女は自身の犯してしまった罪の恐ろしさに苦しんでいるが、それは裁判所では裁けない「罪 rpex」であった。彼女の夫は暴力的な男で、彼女はこの夫からさんざん殴られてきたが、彼が病気になった時、殴られぬことにほっとした反面、「もしこの人がまたよくなって起き出したらどうしよう」と考えた。と、その時、ある「考え」が脳裏によぎった。その考えの具体的な告白の内容は、ゾシマだけに囁かれており、周囲の者には聞き取れず、読者にも明かさ

れていないが、おそらく彼女は、病が重くなって死に至ってくれることを願ったのだろう。

この農婦の隠された願望は、イワンの父親に対する密かな願望とパラレルである。農婦が夫から受けた暴力に対し、恐怖と憎悪の念を募らせていたが、イワンも毒蛇のような醜悪な父親ゆえに苦しみ、それを恨みに思っている。彼は父の無関心ゆえに他人の家に預けられ、その結果、遠慮しながら他人のパンを食べることの辛さをいやというほど味わうことになった。そしてなにより、彼は自身の密かな願望によって、スメルジャコフを教唆するという形で、実際の殺害に加担してしまった。

農婦の夫はもう3年前に死んでいる。つまり、彼女は3年前のことで、ずっと苦しみ続けているのである。苦しみは時とともに薄れるどころか、だんだんと増大してきている。「3年目でございます。初めのうちは気に病まなかったのですが、最近、病みついて、気がふさいできました[57]」。なぜ、気がふさぐのか。それは、死んだあとのことを思い煩うからであろう。死ねば、夫の死を願った自身の罪が裁かれる。だから死ぬのが恐ろしい。あるいは、ただもう時が自身の罪の重さを見つめさせただけかもしれない。

イワンも農婦ほどではないが、自身の密かな願望に良心の呵責を感じている。「心の中では、おれだって、同じような人殺しだからか[58]」。―これは、なぜ自分がミーチャの脱走を助けるために3万ルーブルもの金を供出するのかと自問した時の、イワン自身の答えである。彼は「心の中」の殺人に思いが至ると、「何か遠い、しかし焼けつくようなもの」に心を刺される思いがした。この心の痛みは、「すべては許される」という自身の理論を裏切るもので、そのために彼の誇りは深く傷つく。

裁判所ならば、農婦の＜心の中の犯罪＞など相手にしない、門前払いの無罪である。イワンも、父殺しの罪で正犯として裁かれることはない。スメルジャコフが死に、教唆ということが立証されない以上、いくら自分が申し立てても無罪になる可能性が高い。しかし、農婦もイワンも、無罪を宣告されたからといって、心の棘は抜けないだろう。ゾシマが農婦に出した答えは、「この地上には、真にвоистину悔い改めている者を

神さまがお許しにならないほどの罪はない、あるはずもない[59]」。だから懺悔の気持ちさえ衰えぬようにしておけばよい、そうすればすべて「神様が許してくださる」というものだった。ゾシマは、亡き夫を断罪するのをやめ、彼と和解することを勧める。「亡くなったご亭主がお前さんに加えた侮辱は、心の中ですべて許して、彼とは真に仲直りしなされ[60]」。侮辱を許せというゾシマの忠告は意味深い。ゾシマは彼女が夫の死を願ったことそのものを責めるのではなく、夫から非道な扱いを受けたことで生じた恨みに向けられている。恨みがなくなれば、報復の考えも消え去るというのである。

じつのところ、この報復こそ、イワンが生きてゆく原動力としていたものであった。イワンにとっては、罪人というものはこの世に存在しない。といっても、彼は、人々を（わけても自分を）苦しめた者への「報復 возмедие」が地上で実現されることだけは強く求める。もしそれが実現できないのなら、「自分は自身を破壊する」というほど、報復への執着度は強い。ここから、神なしで報復が「許される」ような理論を構築しようという考えが生まれてきてもおかしくはない。おそらくこの考えをうまくまとめあげることができれば、「すべては許されている」という公式のさらなる「バージョン」ができあがるだろう。そしてこの「バージョン」にも、科学と知性の刻印が押されることになるはずだ。しかし、ゾシマに言わせれば、この科学と知性は民衆のものではない。「彼ら〔上流社会の人々〕は科学のあとを追いかけ、相変わらずキリスト抜きで、ひたすら自分の知性だけで公正にやっていくことを望み、犯罪もなければ罪もないと宣言している[61]」。ゾシマによれば、ヨーロッパではその「正しい社会」に対して、民衆が怒りのあまり暴動を起こし、流血の惨事となっている。

ドストエフスキイは、この悔悟する農婦を通して、自身の信じるロシアの民衆の理想的な姿を提示している。そして彼は、イワンたちはまさにこの民衆にこそ学ぶべきだと考えている。「神の僕である民衆を信じた者は、自分がこれまでまったく信じたことがなかったはずの聖なるものを見る。民衆と彼らがやがて手にする精神的な力だけが、生みの大地か

ら切り離された我が国の無神論者たちを変容させることができるのだ[62]」というゾシマの言葉はそのまま、ドストエフスキイのものと受け取っていいだろう。

ゾシマは農婦への説教をこう結ぶ。「もし悔いているのなら、愛しているということになる。愛するようになればお前さんはもう神の子じゃ……。すべては愛によってあがなわれ、すべては救われる。わたしのような、お前さんと同じように罪深い人間がお前さんに心を動かされ、お前さんをあわれに思うくらいだから、神さまだったらなおさらのことではないか。愛はこの上なく尊い宝物で、これをもってすれば全世界でも買い取れるし、自分の罪ばかりではなく他人の罪まであがなえるのじゃ[63]」。

愛を説くゾシマの教えは美しい。しかしこのような説教が功を奏するのは、農婦が素朴に長老を信じ、魂の不死を信じているからだろう。彼女はイワンとは違い、自分より高みあるもの、聖なるものを信じていた。彼女は自身の罪を「真に」悔いており、敬愛する聖なる長老こそが、魂をお救いくださると心から信じて、500 キロ以上も離れた村からはるばるやってきた。

農婦においては悔いることが再生のきっかけになるが、イワンは悔いることができない。悔いることのできないイワンには、愛することもできない。すでに述べたように、愛は彼にとって、自由を束縛するものであった。

ゾシマは死んだ夫を許すようにと農婦を諭す。彼女はゾシマの言葉を受け入れ、夫を許すことになるだろうが、イワンはそうはいかない。父親への嫌悪、恨みは消えることはない。そのイワンの心の中を弁護人フェチュコーヴィチは代弁しているようだ。「父さん、証明してよ、ぼくが父さんを愛さなければならないことを[64]」。もし証明できれば、その家庭は「ほんとうの正常な家庭」、「理性的で、自覚的で、厳密に人道的な基礎の上に築かれた家庭」ということになり、証明できなければ、息子は父を他人、敵とみなす「自由と権利を獲得する」。この「証明」と「自由と権利」こそが躓きの石なのだ。

イワンにはしかしながら、別の理想的「バージョン」もあった。「生が一瞬であることに何ら不平をもらすこともないと理解し、もはやいっさいの報いなしで兄弟を愛するようになる。（…）その愛の刹那性を意識するだけで、愛の炎は、かつて死後の永遠の愛を希求するなかで燃え上がっていったのと同じくらい、強く燃えさかることだろう[65]」。この「愛の刹那性」に触れた一節は、ゾシマの語る「時と期限」付きの愛を思い起こさせる。彼は言う。「一度、たった一度きり、人には実践的な、生きた愛の瞬間が与えられたわけで、そのために地上での生と、時と期限が与えられたのである[66]」。一度きりの地上の生においてのみ、愛は実践可能で、改めて愛を実践しようとしても、もはや「時はなからん」。魂の不死がないことを前提としたイワンの話と、魂の不死があることを前提としたゾシマの話が、修辞的な部分を除けば、ほぼ一致するのだ。違うのはイワンが、「報い」に拘っていることだけである。この「報い」を求める卑しさを抑えこむため、彼は、「自分の意志と科学」あるいは人間としての誇りを総動員してきた。

この「報い」がなければ愛せないという悩みに関しては、同じ悩みを抱えていたホフラコワ夫人に、ゾシマは次のように進言している。「あなたがそれを悲しんでいるということだけで十分です。できることをなさってください[67]」。ホフラコワ夫人はその場では大いに感激したが、すぐに忘れる。彼女はもうどんなことでもすぐに忘れてしまう。無作法な振る舞いをするラキーチンを家から追いだしたことについても、数日間は、心にもないことをしてしまったと後悔して泣いていたが、「それから突然、午餐のあとで、ぜんぶ忘れてしまった[68]」。こんな「後悔」があるだろうか。

結局、問題は＜真に＞というところに落ち着く。

たとえばスメルジャコフは、神の寛大さを当て込んで、こんなふうに言う（聴き手はフョードル、イワン、アリョーシャである）。「一度は神さまを疑った身でも、後悔の涙を流しさえすれば、許していただけますでしょう[69]」。これは、ゾシマの「真に悔い改めている者を神さまがお許しにならないほどの罪はない」という一節の中の「真に」という言葉

の解釈にかかわる。「真に воистину」といっても、悔い改めが真かどうかはいったいどのようにして裏付けられるのだろうか。真を問い詰めずに、「後悔の涙」に個人的な利益をあてこめば、そこには、神に許されるための図式、マニュアルができあがる。一度はイワンの公式をマニュアルとして、殺人を決行したスメルジャコフではあるが、＜賢者＞イワンのぐらつきを前に、自身も動揺した。そこで彼は方針を転換し、おそらく、以前考えたマニュアル通りに後悔し、神様の許しを乞うて来世に期待することにした。自殺は神を説得するための芝居である。スメルジャコフは、ゴーゴリのユーモアあふれる愉快な小説『ディカーニカ近郷夜話』を読んでもまったく笑わず、嘘ばかり書いてあると不満をもらす＜まじめな＞男である[70]。しかしまじめだからといって、詐欺をはたらかないわけではない。詐欺師もまた、詐欺という自分の仕事に真剣に取り組んでいるのではないか。

行き着くところは言葉の真正さである。

「人類は、魂の不死なんか信じてなくっても、善行のために生きる力をおのずと自身のうちに見出すはずだよ！ 自由への、平等への、同胞への愛の中にね……[71]」。これは、イワンの考えに反駁しようと、息せき切って言われたラキーチンの言葉だが、おそらくドストエフスキイにとっての最大の問題は「霊魂の不滅」云々といった内容ではなく、その＜真剣な＞言葉の羽のような軽さ、あるいは嘘臭い調子にある[72]。

ドストエフスキイ自身が理想としているところは、おそらく単純なことだ。他を愛せよ。農婦の悔悟のエピソードもひと言で言うと、そんなふうにまとめられなくもない。自由に関しては、ゾシマの言う修道僧の道こそ、窮極の理想になるのだろう。「彼ら〔俗世間の人々〕の自由の中にわれわれは何を見るのか。そこにあるのはただもう、隷属と自殺だけではないか！[73]」。「服従や精進、祈りは笑いものにさえされているが、しかしただそこにのみ、本物の、真の自由への道がある[74]」。さらに言えば、この真の自由、最高の自由意志は、傲慢さを捨て、万人のために奉仕する自己犠牲的な行為の中でしか発現することがない[75]。

しかし繰り返すが、最大の問題は、言葉が言葉で終わってしまうかど

うか、言葉が肉化されているのかどうか、その一点にある。他を愛せよという言葉は、キリストでなくとも言える。愛を説くゾシマ長老の伝記は彼を師と仰ぐアリョーシャだけではなく、長老を策士と見做すラキーチンも書いている。

注

1) 本論は「ドストエフスキイにおける子ども―『カラマーゾフの兄弟』をめぐって」（海上保安大学校「研究報告（法文系）」第52巻第2号、平成20年3月）の続編である。

2) ホワイトヘッド、上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社、1981年、132-155頁を参照。

3) たとえばスヴィドリガイロフは、唯一、自分を空虚さから救ってくれる科学として「解剖学」をあげている。またルージンに言わせると、「科学」は、「まず何ものよりも先に自分一人を愛せよ」と教え、「経済学」はそれに、自分一人の利益を追求していれば、万人の利益につながると教えてくれる。ちなみに『カラマーゾフの兄弟』のイワンは、非ユークリッド幾何学にも言及する。

4) Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.22. «Наука». Л. 1981. Стр.34. 『カラマーゾフの兄弟』のテキストには、本全集14巻、15巻を用いた。以下、本全集は『ドストエフスキイ30巻全集』と略記する。

5)『ドストエフスキイ30巻全集』第14巻、284頁。ゾシマの考える俗世間の「自由」については後述。

6) 同上、275、286-287頁を参照。ドストエフスキイはまた、スタヴローギンに、科学は善悪に関しては「力ずくの解決」しかもたらさなかった、と語らせている（ただし、その言葉を読者に伝えるのはシャートフ。―同上、第10巻、199頁）。

7) 『罪と罰』でも、科学の道徳が問題にされている。ラスコーリニコフは見知らぬ男に付け狙われる泥酔した少女を最初、救ってやろうと思うが、結局はこの少女を救っても、誰か他の少女が同じような目に遭うのだと感じるようになる。少女は固有性を失い、統計上の単なるパーセンテージとして認識されることになるのだ。

8) ジョルジュ・カンギレム、金森修監訳『科学史・科学哲学研究』法政大学出版局、1991年、pp.311-354を参照。

9) 『ドストエフスキイ30巻全集』第23巻、19頁。

10) 同上、第15巻、18-19頁。

11) 同上、19頁。

12) Макаричев Ф.В. Феномен «хохлаковщина» – В кн.: *Достоевский. Материалы и исследования (19).* «Наука».Санкт-Петербург. 2010. Стр.323.

13) 前掲『科学史・科学哲学研究』、420頁。

14) 『ドストエフスキー人物事典』講談社学術文庫、2011年、507頁

15) 『ドストエフスキイ30巻全集』第15巻、32頁。

16) 同上。

17) 「地質学的」などというという表現を用いることそのものが斬新だ。地質学は18世紀に一つの分野として独立し、19世紀になって成熟した科学である（メイス

ン、矢島祐利訳『科学の歴史』岩波書店、1956年、33頁を参照)。

18)　『ドストエフスキイ30巻全集』第15巻、83頁。強調は筆者。

19)　同上、第14巻、65頁。強調は筆者。

20)　Jackson R.L. Dialogue with Dostoevsky : the overwhelming questions. Stanford University Press. Stanford, California. 1993. P. 295.

21)　『ドストエフスキイ30巻全集』第5巻、112頁を参照。

22)　村手義治訳、「ドストエフスキーの道徳的理想」(U.グラーリニク編、北垣信行監修『ドストエフスキーと現代』ナウカ、1981年、所収)、131頁。

23)　『ドストエフスキイ30巻全集』第15巻、29頁。

24)　同上、83-84頁。

25)　同上、第14巻、76頁。

26)　「自然必然性」という強制のもとでは自由の存在する余地はない、一方、人間の実践的行為を考える時、自由を前提とせざるを得ない。この二律背反をカントは「二つの教説」によって、すなわち「同一事物に現象と物自体という二重の存在構造を見る」ことによって解決した(井上義彦『カント哲学の人間学的地平』理想社、1990年、174頁を参照)。ゴロソフケルによれば、カントの二律背反の「アンチテーゼ」が『カラマーゾフの兄弟』という小説の「真の主人公」ということになる(ゴロソフケル、木下豊房訳『ドストエフスキーとカント―『カラマーゾフの兄弟』を読む』みすず書房、1988年、72頁)。加えて言えば、このカント的な条件付きの思考法は、スタヴローギンを特徴づけるものでもある。

27)　カール・R・ポパー、小河原誠他訳『実在論と科学の目的』上(岩波書店、2002年、97頁。

28)　ザハロフは、ゾシマの言葉にある「明白さ、明快さ」が、イワンの言葉にはないと指摘している。これはまさに、自身の話の内容を確信しているかどうかの差であろう。См : Захаров В.И. Система жанров Достоевского. «Издательство Ленинградского университета». Л. 1985. С.160-161.

29)　『ドストエフスキイ30巻全集』第14巻、25頁。

30)　同上、第15巻、29頁。

31)　同上、第21巻、16頁。

32)　同上。

33)　『ドストエフスキイ30巻全集』第25巻、178頁。

34)　同上第26巻、167頁。

35)　前掲『ドストエフスキーとカント―『カラマーゾフの兄弟』を読む』、72頁。

36)　『ドストエフスキイ30巻全集』第14巻、212頁。

37)　同上。

38)　同上、130頁。

39)　同上、第15巻、57頁。

40)　同上、69頁。

41)　同上、第14巻、131頁。

42)　同上、132頁。

43)　ミハイル・バフチン、望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫、480 - 485頁を参照。

44)　『ドストエフスキイ30巻全集』第14巻、53頁。

45)　同上、215頁。

46)　同上、236頁。強調は筆者。

47)　『ドストエフスキイ30巻全集』第5巻、124頁。ちなみにバフチンは、地下室

人が自分の顔に執着するのは、「他者の評価と意見の権力」をその顔に感じるからであると指摘している（前掲『ドストエフスキーの詩学』、486 頁）。

48）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、275 頁。

49）同上、37 頁。

50）同上。

51）マックス・ピカート、佐野利勝訳『人間とその顔』みすず書房、1959 年、7 頁を参照。

52）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 15 巻、108 頁。

53）同上、第 22 巻、6 頁。

54）同上。このような「顔」についての考えは、マックス・ピカートも共有している。ピカートは言う。「たいせつなのは（…）個々の部分や特性がたがいに出会い統一されて、顔の像の力によって一つの協同体が生まれ出るということだ。だから、人間はすでに似姿の構造によって、協同体を想起せしめられるのである」（前掲『人間とその顔』、56 頁）。

55）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、455 頁。

56）同上、215 頁。

57）同上、48 頁。

58）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 15 巻、56 頁。

59）同上、第 14 巻、48 頁。

60）同上。

61）同上、286 頁。

62）同上、267 頁。

63）同上、48 頁。

64）同上、第 15 巻、171 頁。

65）同上、83 頁。

66）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、292 頁。強調はドストエフスキイ。

67）同上、53 頁。

68）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 15 巻、17 頁。

69）同上、第 14 巻、120 頁。

70）この点で、スメルジャコフはラキーチンに似る。彼らは冗談を理解できない。ドミートリイの言葉を用いて言えば、笑えぬ彼らの「精神」は「平板で、干からびている」（『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 15 巻、27 頁）。

71）同上、76 頁。

72）ドストエフスキイによれば、フランス人権宣言の自由、平等、同胞愛に関しては、現実においてはまったく実現されていない。彼は、たとえば「自由」などというものは、法律の枠内で好き勝手にすることで、それは「100 万フラン」を手にする者だけの特権であると揶揄している（「冬に記す夏の印象」―『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 5 巻、78 頁）。

73）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 14 巻、284 頁。

74）同上、285 頁。

75）『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 5 巻、79 頁を参照。